

受難節第主 5 日 説教 「深い傷と流れる血に」 要旨

牧師 黒田直人

日本キリスト教団藤沢教会 2022 年 4 月 3 日

マタイによる福音書 9:14~17

新しい年度を迎えました。そこで、その私たちに共に与えられた御言葉がこの日のイエス様のお言葉であります。そこで言われている一つの大きなテーマは福音を信じ、生きている私たちの「新しさ」です。まさに、年度の切り替えにふさわしい御言葉であると思いますが、ところで、新しいということはどういうことなのでしょう。新しいということはつまり、いつまでもそのままではいられないということです。ですから、それを聞いて私などは、ドキッとさせられたりもしたわけです。たたき直してやると皆さんから強く言われそうですし、何よりも、前回の説教で私が申し上げたことを皆さん覚えておられるのでしょうか。その最後の方で、主の憐れみということから「優しさ」ということについてお話したわけですが、そこで申しましたことは、優しさとは、身を削り、身が細るものでもあるということでした。ですから、イエス様がここで仰っている「新しさ」というものの中には、当然、結果としてそういう効能が含まれているということです。従って、この日の御言葉に私が聞き、この迎えた 2022 年度を過ごすならば、恐らく、きっと、来年の今頃には、私も、シュツとした体つきになっている、そういうことでもあるのでしょう。ですから、是非、それを楽しみに、と申し上げたいところではありますが、ただ、皆さんがもしそれを期待するならば、そこで申し上げなければならないことが一つあります。それは、イエス様が仰っているこの「新しさ」について今聞いているのは私だけではなく、皆さんも同じように聞いているということです。つまり、「新しさ」を求められているのは、私だけではなく、この御言葉に聞いている私たち、私を含めた藤沢教会に連なるすべての人々に、イエス様は等しく同じように、年度の切り替えに際しては、この「新しさ」が求めているということです。

従って、ここで言われている新しさは、互いに押しつけ合うものではないと仰うことです。つまり、私たち全員で、ということでもありますが、年配の方に馴染みのある言い方をすれば、今年に限っては、満年齢ではなく、数え年で 2022 年度を私たちは迎えたということです。つまりは、こうして御言葉に聞いている私たちは、みんな一斉にこの新しさを経験しているということです。それゆえ、その私たちがそこで言葉にすべきは、「牧師のくせに」とか、「クリスチャンのくせに」とか、そういうことではありません。一人の漏れもなく新しくされた、そして、御言葉が、当時の人々が大事にしていた断食ということを取り上げているのはそれゆえのことだということです。ちなみに、この断食についてであります。それについては、イエス様も、御言葉も、教会も、不必要なものだとは考えておりません。「そのとき、彼らは断食することになる」と、十字架の出来事を指し示しつつイエス様がこう仰っているように、私たちキリスト教会は、敬虔のしるしとして断食を大事にしてきたからです。

ただし、それは、強制されてするものではありません。けれども、だから、軽んじていいということでもありません。大事にすべきではあるのですが、ただ、こういうことは人から多少なりとも強くいわれなければ身につくものでもありません。ですから、ヨハネの弟子たちもそういう意味では、親や回りの大人たちから幼い頃より度々強く言われることがあったのでしょう。だから、それをしていない人を見ると、「どうしてあなたは」とどうしても言いたくもなくなってしまったわけです。それは、彼らがそれだけこの古くからあるこのしきたりを大事にしていたからでもあります。まただから、自分が大事にしているものを人がないがしろにしていると思うと、腹も立つわけです。そして、それはどうしてなのかと

言えば、その人たちが部外者ではなく、仲間であるからです。仲間だからこそ、仲間であることの一つの証拠でもある、この古くからあるしきたりを守って欲しいと、ヨハネの弟子たちはそう思ったわけですが、ただ、この部外者か、それとも仲間か、ということはそもそもこのところでどういうものなのでしょう。何ををもって私たちは仲間を仲間と理解しているのか、イエス様がここで仰る、新しい、古い、と言うことが、この点に関わるものでもあるのです。

ただ、ヨハネの弟子たちがしたように、仲間だからこそ、というところで行っていることは、時に仲間内に不協和音を広げ、最悪の場合は袂を分かつということが起こり得るわけです。ただ、今申し上げたように、イエス様は断食自体を否定しているわけではありません。そして、それゆえにまた、彼らのことをイエス様も部外者だとは思ってはいないということです。ところが、そのイエス様が、なぜと問うヨハネの弟子たちに向かって、ここで新しい古いということをはっきりと語るのです。ですから、それが一つ分かりにくいところでもありますが、分かりにくいところはそれだけではありません。もう一つ、断食というこのしきたりは、イエス様も弟子たちも、恐らくは、それぞれが幼い頃から重んじてきたものでもあるのです。つまり、慣れ親しんだものの一つだということです。ですから、イエス様が新しい古いを語ろうとするその意図には、あからさまな批判が含まれているとは思えません。しかし、それにも関わらず、イエス様はそれを言っちゃあお終いよということをあえて仰っている、つまり、彼らが古くて、自分たちが新しい、と、そういうニュアンスのことをここではっきりと仰っているということです。ただし、私たちはそこで一つ気をつけなければなりません。それは、イエス様は右と左をはっきりさせてはいるのですが、ヨハネの弟子たちのことを部外者とは見なしていない以上、イエス様には、ヨハネの弟子たちやファリサイ派の人々に不信仰というレッテルを貼って、奴らはだからダメなんだ、古いんだとの決めつけてはいないと

いうことです。ですから、ここは私たちがしっかりと踏まえておかなければならないことです。なぜなら、こういうところを疎かにすると、イエス様の言葉も聖書の御言葉も、部外者から見れば、ただ単に自分に都合のいい言葉にしか聞こえませんが、それゆえにまた、このことはそれだけに止まるものでもないからです。それは、結局は、仲間内においても、互いにレッテル張り合い、排除するための言葉としてしか御言葉は聞こえなくなってしまうからです。けれども、ここでイエス様が、古い新しいと言うことを革袋の譬えをもってはっきりと仰っているように、だから、曖昧にしていいということではありません。

違いを違いとしてその当事者の間で明らかにしようとするのは、これは当然のことではありますが、そこに温度差がある以上、その受け止め方は必ずと違ってくるわけです。つまり、生ぬるく、面倒なところからいつもいつも逃げているような私のようなものもいれば、何に対しても一生懸命に取り組む人たちも、仲間内にはいるわけですから、この温度差をどう埋めるかが一つの問題でもあるということです。仲間内で「どうして、なぜ、」との思いが生じるのはそのためです。ただ、一緒にいる以上、そこから逃げたり、また互いに押しつけ合ったところで問題が解決することはありません。折り合いをつけることができなければ、関係性はいずれどこかで破綻することにもなるからです。ただ、それで折り合いがつかないのが仲間というものでもあるのでしよう。それは、仲間、友達、家族、同じ一つのコミュニティに生きているということは、そういうことでもあるからです。

ただし、この仲間であるということは、いわゆる空気を読むかのようなものでもなく、また、強制力をもって体裁だけ整えればすむものでもありません。人は思い通りにならないとすぐに腹が立つ者ですし、腹が立つからそれをなんとかしようとするものです。ただ、そこで、この日の御言葉に戻ってイエス様のお言葉に聞いていくと、イエス様は何と仰っているのか。新しさを強調しつつも、こ

こでは、新しくなれ、新しくあれ、とは仰ってはいないのです。「新しいぶどう酒を古い革袋に入れるものはいない。そんなことをすれば、革袋は破れ、ぶどう酒は流れ出て、革袋もダメになる。新しいぶどう酒は、新しい革袋に入れるものだ。そうすれば、両方長持ちする」とこう仰っているのです。このことはつまり、新しいものは新しいものに入れるが当たり前である。なぜなら、それが長持ちの秘訣であるからだ、つまり、ポイントはこの長持ちするところにあるということです。

ですから、私たちが新しくあるかないか、その私たちの入る器が新しいか新しくないか、それも大事なことはあるのですが、もっと大事なところは、長持ちするためには、その両方が新しくなくてはならないということです。なぜなら、それは、そのどちらが欠けてもうまく行くことはないからです。そして、それについては、彼らも初めて聞いたことではありません。経験的にすでに知っていることであり、それは、革袋の中でぶどう酒が「まろやかで、いい加減に」熟成されるのは、条件が整ってこそそのものでもあるからです。そして、それについては、いわゆる発酵食品というものがすべてそうであるように、それは私たちもよく知るところでもあるのでしょ。ですから、そのためにも時間をかけることが大事なのです。それは、時間をかけるということは、「いい加減で、適当に、なし崩しに」ということではないからです。任せる、委ねるということであり、身勝手な自分の思いで、器の中をかき回すことではないからです。まただから、御言葉は、入れる、入る、ということ強調するのですが、そのためには、入る時期、入れる時期、つまり、そのタイミングがいつなのかということを経験的に知っていなければなりません。それは、その準備がしっかりと整っていなければ、うまく行くものもうまく行くことはないからです。

ですから、「花婿と一緒にいる間、婚礼の客は悲しむことができるだろうか」とイエス様が仰ることは、イエス様が仰る新しさを知るために必要な時間である

ということです。けれども、それをヨハネの弟子たちは余計なこと、無駄なことと思ってしまったわけです。腹が立ったのはそれゆえのことでもあります。しかし、イエス様が仰るところから分かることは、人が無駄だと思えるものも私たちの信仰においてはとても必要なことということです。そして、それが、神様の独り子であるイエス様と共にあるということでもあります。けれども、それに続いて、「花婿が奪い取られるときが来る」とイエス様が仰るように、イエス様と共にあるというこの新しさ、その新鮮な驚き、感動は、いつまでも長続きするものではなく、そう遠くない将来には終わりを迎えることになるということです。そして、それが十字架の出来事でもあります。このことはつまり、私たちが新しいぶどう酒であるとすれば、新しい革袋はイエス様のことになり、そうすると、イエス様の十字架の出来事が何か、普通に考えれば、この新しさをすべて台無しにしかねないものでもあるということです。ところが、時間をかけて私たちが知ったことは、その反対のことでした。新しいぶどう酒が新しい革袋の中でやがて芳醇で味わい深いものとなっていった、それが教会が放つキリストの香りというものでもあるのでしょ。このことはつまり、十字架の出来事は、ぶどう酒を入れた革袋を封印するための出来事であったということです。それゆえ、それについては、こうも考えられないでしょうか。雑多で、まだまだ荒々しいだけの素材に過ぎない私たちがイエス様の中に入れられ、十字架という封印が神様によってなされた、このことはつまり、十字架の出来事は、私たちを味わい深いものとさせるための神様の祈りであり、その祈りが思いっきり込められたものがイエス様の十字架の出来事であったということです。

ですから、私たちの信仰的態度、敬虔なその姿というものは、あれもこれも全部自分でしないと気がすまない、という、そういうせっかちさから出てきたものではありません。待つことであり、ゆっくりゆっくり時間をかけ、そこから出てくるものだということです。そして、

そのことは一体どういうことなのか、これは自分でも妙に納得するところがあったのですが、発酵が進むということはそもそもどういうことなのでしょう。革袋の中では、いろいろなものが混ざり合い、混ざり合っているがゆえにせめぎ合い、ぶつかり合っているということですから。つまり、そのように混ざり合い、混ざり合っているからせめぎ合い、せめぎ合うから、ぶつかり合う、それがイエス様の中にある私たちであるということです。ですから、その中ではいろいろなことが起こるわけです。でも、発酵が進むにはそれも必要なことであり、そして、そのためには、封印を軽々に解くことはできないのです。ただ待つしかないし、ゆっくりゆっくり時間をかけるしかないのです。けれども、それが一番確実なことであり、なぜなら、暴れ回り、ぶつかり合う私たちのことを、まるでタマゴを抱く母鳥のように包み込んでくださっているのが私たちのイエス様であるからです。それゆえ、私たちの敬虔さ、信仰的態度は、このイエス様に包まれているとの安心感から出てくるものであり、あれもこれも全部しなければ気がすまないという、そういう落ち着きのないところから出てくるものではないということです。それゆえ、私たちは、それを知るためにも、イエス様に包まれていることを常に覚えたいと思うのです。それも、雑多な者同士がせめぎ合い、ぶつかり合い、やがて混ざり合っていくその過程を、その時間を共に過ごす中で、この包まれているという感覚を身につけ、この感覚によって自らを養うものでありたいと思うのです。

最後に、では、それがどういうことなのかを考えたいのですが、それは、あなた任せにしないということです。せめぎ合い、ぶつかり合い、やがて混ざり合っていくその過程を辿るということは、自分自身が変わえられることでもありますし、自分自身で変わりたいと祈り願い求めることでもあるのです。このことはつまり、自分はこうなると、意固地になり頑張っているだけではダメだということです。その反対に、自分はダメだと決めつけて、諦めているだけでもいけない

ということです。そして、それについて、養老孟司先生流で言えば、「いいことをしよう、したい」などとは思わないということです。なぜなら、神様に全てをお任せするということは、自分に拘り、しがみつき、自分がいいことをしよう、したい、そういうものではないからです。そもそものところでは、そういう拘りを捨て去ることができるし、捨てていいということでもあるからです。なぜなら、良くしよう、よくありたいと思わずとも、神様に選ばれ、新しくされた私たちは、イエス様の十字架の贖いゆえに、そもそものところで「良いもの」であるからです。つまり、それが神様の摂理、創造の秩序ということでもありますが、それゆえ、私たちはイエス様という新しい革袋の中で、新しいがゆえに熟成されていく、そして、それは、ただ流されるまま、適当に、ということではありません。私たちにはそれぞれにふさわしい形で賜物が与えられているのです。革袋の中の葡萄酒が熟成が進むのは、この与えられているそれぞれの賜物が生かされるからであり、つまりは、この私が「用いられる」ということなのです。そして、この用いられるということは、すぐに分かることはありません。だから、そこで私たちの気持ちはどうしても急いでしまうのですが、しかし、そうであるからこそ、ゆっくりと時間をかけて、時に立ち止まりながら、今までがそうであったようにこれからも、主の御手に導かれながら歩み続けるものでありたいと思うのです。祈りましょう。